

南風

南照寺 寺報 第四号 平成二十五年 夏

炎暑の候、熱中症対策に腐心しております。

さる七月二十日第三土曜日、真夏日とはいえ少し爽やかさの残る、午後二時の明るい日差しの下に、月一回のお勤めの会が開かれました。今回も前回に引き続き、お勤めの前にざつと正信偈の草四句目下の説明をいたしました。勤行本である「赤本」の中の表記にもちよつと触れたのですが、細かい事は端折りました。やっぱり小学唱歌のように、繰り返しお勤めしていただくことが一番早道では、と。この度はまた別に、「白骨の御文」もあがりました。非常に有名なもので、皆さまにも馴染みのものでありましようが、本堂であるところに格別のものが感じられました。

お勤めの後の歓談は、しばしの間この寺報「南風」についてでした。文章、内容はともかく、先ず字が小さいのと、裏表で文字量が多く、とても読み切れませんよ、という指摘であります。これはこの形に寺報のレイアウトを決めよう、とした時から、実は私自身懸念していたことではありません。しかしながらあえてこのスタイルにしたのは、多少理由があります。

・寺報は、新聞である。

今時、一般の新聞の紙面がどれぐらい読まれているのかわからないのですが、所謂四大紙の文字サイズを考えると、特に小さい、ということはない大きさかと思えます。先輩の寺報の一つに、恐らくそのあたりの意見をくみ取られたのでしょうか、大きく、文字間の広いものがあります。なにか詩集みたいで行間を読む、といったようなところがありません。これは次のところに引つ掛けてきました。

・寺報は、お手紙である。

この寺報を通してしか私のことを知っていただけない方々に、なにかしらお伝えしているつもりでおり

ます。そして今のところ、それが一番重要だと思っております。いわば一方通行の文通のようなものでしょうか。文章というのは非常に怖いところがあって、書いた人を丸裸にしています。正直、身を切るような思いで綴っております。

・寺報は、回覧板である。

とはいえ、連絡事項をきちんとお伝えできなければ、落書きみたいなものです。重要案件が駄文に埋もれているようでは困ります。このことについてはなんとか改善を、と思っております。

次に、これも前からの懸案であるところのお墓の件で、谷町界隈のお墓のチラシ等をいろいろと集めていただいたことでした。価格を参考に、とのことでしたが、今後はむしろ、一心寺的な合同供養の場としての集合墓が求められるのではないかという意見も出て、あくまで参考の領域を出ないところで、墓の新規募集案はそのまま留保されました。

最後に、これは僕からでしたが、次回八月のこの会の日程をお盆の期間にずらす方がいいのか、またお盆には昨年同様、法要を勤めたほうがいいのか、報恩講はどうするのか、という三点について意見を募りました。たくさんお話しいただいて、大いに盛り上がったのですが、一応その場で一致したことだけを記しますと、

・八月も通常通り、つまり十七日の第三土曜日に、この会は開くということ。

・お盆はそれぞれの都合でのお墓参りが従来なので、今年には特にお勤めはしない、ということ。

・報恩講は、必ず勤めようということ。
でした。

報恩講の日時については、十月のお勤めの会の日、つまり第三土曜日の十九日午後二時からというのが、一番無理がなくていいのではないか、と思いましたが、今、今のところそのように進めていこうかと思っております。

より多くの方に参加していただけるには、どのようにしたらいいのかということで、これまた盛んに意見が交換されました。

歌の得意な方に、浄土真宗にある様々な賛歌を唱っていただくとか、仏教や宗教について知りたかったあれやこれやを学んでみたいとか、住職、つまり私自身の、真宗との出会いをも含めた昔話を面白く聞きたいとか、誰もが行きたいなと思える楽しい会にするべく、たくさん智慧を搾っていただきましたが、じゃあそもそも報恩講とはいかなるものなのか、という段になって、とたんにそこがはつきりしない、という心細い話になってしまいました。

- ・報恩講とは、恩に報いるお講であります。
- ・報恩とは、報恩謝徳、仏恩報謝のことであります。
- ・具体的には、本山では親鸞聖人の御命日に勤まります。
- ・法事ですので、末寺などでは御命日の十一月二十八日の前にお勤めします。
- ・各家庭でも、勤まることがあります。

実はこういうことをいくら並べても、由無し事に過ぎないのだろうと。マンガの味でも、味噌の味でも、とにかく食べてもらわないことにはわからないのだ、ということに似ています。それらを知らない誰かにその味を説明しようと骨折った経験のある人なら、誰でも合点がいくに違いありません。

さらにそれぞれの方の、それぞれの報恩講の受け止めということであれば、何かを定形的に決めつけるのは危険ですらあります。なぜ大事なのか、何が願われているのか。共に聞きひらいていける場を建立することは、どういうことなのでしょう。このあたりのごことを少しずつ押さえていけたらと思っております。

「どうせ」という言葉が嫌いです。その後にくる文の意味するところは、必ず仏教語でいう「慢」（思いあがって人をあなどること）、つまりサボっている状態を表現しているように思えるからです。

例えば、自分の行為に「どうせ」をつけてみますと、「どうせおれなんかいくら頑張ってみても……」となります。出来ないこと、やらないことの言いわけを先に行っているのです。自分を卑下して、その場を正当化する。「卑下も自慢のうち」とはこういう「慢」を言うのでしょうか。

つぎに、他人の行為に「どうせ」をつけてみますと、「どうせあいつのやることなんて……」「どうせたいしたことないんでしよう……」と、そのまま相手を小馬鹿にした態度になります。これは、言いかえれば自分がずつとすぐれているつもりでいるので、そこから努力など生れようはずもありません。結局その場に安住して、一步も動こうとしない。サボっているのですね。

じゃあサボって何が悪い、とねじ込まないでいただきたいです。私もサボるのは大好きで、ものごさな怠けん坊です。勿論それをいいとは思っていませんが、良くないはずのことを「どうせ」の裏に隠蔽して、目に入らないようにし、いつの間になかったことのようにして、こっそり棚上げしてしまうそのやり方が、どうにもいただけなのです。

どうせなら「どうせ」を取って直言してみる。とたんにヒリヒリ痛む現実が突きつけられる。私は思いあがって人をあなどっています、と。

・次回の「お勤め」（正信偈、同朋奉讃式）の会は、先述の通り、

八月十七日（土）午後二時より 於南照寺本堂

です。その次は九月二十一日の第三土曜日を予定しております。もうお彼岸ですね。
